

題 目 Facebook 上の人間関係の多様性と対人摩擦の関係の日米比較～局所関係流動性の観点から～

氏 名 椿原脩平

指導教員 結城雅紀

Facebook（以下、FB）上では、オフラインでは同時に存在することがあまりない各人の持つ多様な対人関係が全て一つの空間上に再現されることがある。この状況を Context Collapse（以下、CC）と呼ぶ（Vitak, 2012）。CC 状況下では、対人摩擦が上昇すると考えられる。これを実験で実証したのが、Binder et al., (2012) と Thomson (2016) である。FB 上での対人関係の多様性と FB 上での対人摩擦に正の相関があるが、その相関には文化差があるということが示され、日本では多様性の上昇に対してあまり対人摩擦が上昇しないことがわかった。Thomson (2016) はこの文化差を、関係流動性の程度で度合いが異なると考えられる不和回避行動によって説明を試みた。実際に不和回避行動が米国よりも日本でより積極的に行われることを示したが、関係流動性との関連は示されなかった。不和回避行動の文化差を関係流動性が説明しなかった理由として、CC の状況下での対人関係の現象を説明する際には関係流動性よりも、各人が持つ対人関係の中の一つに焦点をあてた局所関係流動性がより高い説明力を持つことが提唱されている。CC 状況下では、最も影響力が強いカテゴリの対人関係 に合わせて行動をとる可能性がある」と指摘されているからだ（Hogan, 2010）。そこで本研究では ①FB 上の対人関係の多様性が上昇するにつれて FB 上の対人摩擦が上昇し、この上昇の度合いには文化差があり日本で上昇度合いが低く、②この①は日本で大きくなる不和回避傾向により影響を受けており、③日本で不和回避傾向が高くなるのは日本で米国よりも高くなる局所的な関係流動性が、④不和回避傾向の文化差を説明するということを示すことを試みた。分析の結果、①は先行研究と同様の結果が得られた。②は、日米で不和回避行動について有意な差が見られた。しかし、②の日本で大きくなる不和回避傾向により影響を受け、日本では多様性が上昇しても対人摩擦が上昇しないという点は今回の実験では有意な結果が得られなかった。③は、仮説が支持される結果となったが、④の仮説を支持する結果は見られなかった。今後の研究の方向性として、ある種通説として語られる「低関係流動性社会では不和回避が行われる」ということについての論拠が不十分であることが考えられるため、関係流動性の高低と不和回避の関係性をより細かに検証されたい。